



城の立地と構造

城は、四方に眺望のきく比較的傾斜の急な孤立丘を取り込んで築かれており、外敵をいち早く確認できることや、南側に良港を控えていることなど、極めて良好な立地条件を備えています。城は四つの曲輪からなり、各曲輪は珊瑚質石灰岩の切石を使って曲線状に築かれています。一の曲輪は最高所に位置し、瓦葺きの建物やアーチ式の門があったと伝えられています。二の曲輪には東西14.5m、南北17m規模の舎殿跡があり、覆土によって遺構を保存しています。西側には、抜け道の伝説がある「ウシヌジガマ」と呼ばれる洞穴があります。三の曲輪は、儀式などを行う広場と考えられ



ています。また、三の曲輪の門は木造の四脚門があったと推測されます。四の曲輪には、南西側に南風原御門、北東側に西原御門と呼ばれるアーチ式の門があったと伝えられ、さらに五ヶ所の井戸と建物跡を推測させる礎石もあります。また、四の曲輪の南東側の一段高くなった箇所は、別名「東の曲輪」と呼ばれ城壁が巡り、水場を確保する上で、軍事的に重要な箇所でした。

このような城には、政治の安定を願い、按司の威厳を維持する守り神として、「コバツカサ神」「火の神」を祀った拝所があります。「コバツカサ神」は、一の曲輪の中央部にある円柱状に加工された岩(タマノミウチ巖)に祀られており、現在でも多くの人々が参拝に訪れます。三の曲輪には「イシツカ神」、通称「肝高の御嶽」があり、その横にはノロ(神女)が城拝みに来たときの休息する座石(トウヌムトウ)があります。

勝連の繁栄



勝連の鳴響みテダ

かつれんのとよみてた

百浦の鳴響みテダ

もつうらとよみてた

肝高の勝連の鳴響みテダ

きむたかのとよみてた

勝連の板口を

かつれんのいちやくち

肝高の金口を(開け)

きむたかのかなやくち

上からは照間浜に

かみからはてるまはま

下からは浜川に

しもからははまかはに

「おもろさうし」十六卷一四〇

(大意)勝連の気高く名高い按司様は、百浦に鳴りとどろく按司様である。勝連の立派な港口を開け、上からの船は照間浜に、下からの船は浜川に着けて栄えていることよ。勝連のテダ(領主)を讃えるオモロ。照間浜は金武湾に面し、浜川は中城湾に面している。いずれも海から勝連への入口として交易にかかわる重要な港である。



百十踏揚(ももとふみあがり)

「もも」とは百に十を重ねる、すなわち「いつまでも」の意で、「ふみあがり」は「踏んで揚がる」すなわち「秀でる」「名高い」の意で、気高く美しいと讃えられました。しかし、激動の時代に、壮絶な権力闘争に翻弄され、政略結婚にて阿麻和利へ嫁ぎ、その阿麻和利を倒した鬼大城と再婚しました。しかし、鬼大城もクーデターにより追われ滅ぼされるという波乱に見舞われます。

美しい「御城の花」踏揚はやがて島尻玉城へ生き延び、寂しい隠居生活を余儀なくされます。踏揚は動乱の時代、悲劇の王女でした。

海外貿易を先駆けた

時代の風雲児、阿麻和利は勝連に大きな富と名声と文化をもたらした



復元された磁器



瓦

貨幣

15世紀中葉の戦(阿麻和利の乱)で落城した勝連城ですが、城そのものは16世紀まで何らかの形で使用されていることが分かってきました。出土遺物は奄美、日本、中国、朝鮮、東南アジア産の文物がみられ、その種類も多岐にわたっています。例えば、大量の中国産陶磁器には全国的にも珍しい元染付が多くあります。そのほか刀や鏃、鎧類、装身具の玉類、大和系の瓦、陶磁器類、東南アジア産の陶磁器類、さらに馬、牛、熱帯地域にすむオウムなどの生物も飼っていたことが判り、実際に勝連城が海外貿易をして琉球でも強大な力をもっていたことがしのべられます。



勝連城跡

KATSUREN CASTLE REMAINS